

## 第二章 心の教育



## 子どもたちの心を開く

教育は、教師と生徒が向き合って行われるものです。ここでは教師が生徒に教えるという一方通行な関係ではなく、双方向的な、お互いに心を開いた関係が前提として求められることでしょう。

国語や数学の知識を与えることだけではなく、まず子どもたちの心を開き、そこに思いやりなど人間として必要な精神や、生きていこうとする情熱を吹き込んでやることこそが、教師や学校の役割ではないかと思えます。

一口に「子どもたちの心を開く」といっても、一筋縄ではいきません。子どもたちと向き合う日本中の、いいえ、世界中の人たちが、日々、この課題に取り組んでいるといっても過言ではないのでしよう。

昔から教育学の専門書もたくさん出ていますが、私は初めて教壇に立つことになった五十年前から、手探りで、きわめて自己流の方法を実践してきました。

前の章でお話したように、長崎はキリスト教の背景を強く持つ場所ですが、かつて江戸幕府がキリスト教の信仰を禁止していた時代のなごりは戦後になってからも完全に拭われることはなく、ずっとその土地に脈々と横たわり続けていました。キリスト教を邪宗門、つまりよこしまな宗教と

する空気は、私が教師となってもどった一九五五年（昭和三十年）のころにはこの地にまだ色濃くただよっていたのです。地方都市ですので、空気の循環が内部で完結してしまいがちで、なかなか外部との空気の交換が進みません。

しかし、そうした空気が、若い私を奮起させたように思います。当時の私は、絵に描いたような熱血教師でした。なにしろ、たくさんの子どもたちを前にして、「彼ら全員を改心してみせる。」という野心に燃えていたのです。子どもたちの心をしっかりと入れたものに入れ替えてやろうという「改心」のほか、キリストの教えに気付いてもらう「回心」を期待する気持ちもありました。そして、そのためには、まず「子どもたちの心を開く」ことだと考えました。

当時、私が担当した授業は倫理社会や宗教などでした。中には、「倫理社会も宗教も大学受験に関係ないし、金儲けの役に立つわけではない。」と露骨にやる気のなさを見せる子どももいました。が、私は事前に授業用のノートをつくって工夫を凝らしたり、宗教の時間用として手づくりの楽譜なども用意したりしました。だいぶあとになってから、同窓会で卒業生と歓談していたおり、当時の生徒の一人が、

「田川先生の授業は、本当によく歌う授業でしたね。学年の終わりのころになると、分厚い、立派な歌集ができあがっていましたよ。」

